



季節を知ったら
暮らしが楽しくなった

〜第一一〇号〜

小暑

七月七日



大黒一本

宇治岳道

久しぶりに宇治岳道を登りました。伊勢神宮内宮の裏手から、朝熊ヶ岳山頂近くに建つ金剛證寺へ続く登山道。地元では朝熊ヶ岳を「岳さん」と呼ぶのでこの名があります。また、「朝熊かけねば片参り」といわれ、伊勢参りにも欠かせない巡礼道にあたりました。

今回の岳道行きは、地元の方々に案内いただきました。まず教えてもらったのは、出発地点の石碑。神宮司庁のゲート内のため、一言かけて入ると、赤茶色の自然石に「朝熊岳道」としっかり彫られていました。年号は寛永三（一六二六）年ですから、江戸時代初めに建立されたものです。

現代でも「日本百名山」がありますが、江戸時代にも名山を選んでいました。画家の谷文晁が九〇もの山を記した『日本名山図会』には、朝熊ヶ岳が七四番目に載っています。当時もよく知られた山だったのでしよう。

それは、岳道の路傍に立てられた町石でもわかります。岳道沿いにある石仏、道標のたぐいをすべて写真に収めると、舟形地藏町石、大形の石仏町石、角柱町石の三つのタイプに分かれました。そのうちの角柱町石は、延享三（一七四六）年、江戸田所町の萩原三郎右衛門が建てたものでした。江戸田所町というと、日本橋の商人町。おそらく願掛けをした豪商が建てたのではないのでしょうか。

以前、岳道は長年の風雨で道が削れていましたが、久しぶりに登ると、石が積まれ、歩きやすくなっていました。近頃、宇治館町の方が一人で、黙々と整備されているそうです。

信仰の道というのは古えの人々の記憶が刻まれています。新しい思いもまた加えられているのです。

文 千種清美



伊勢内宮前